

韓国特集

「～韓国を知り、日韓演劇の
未来を探る～」



2020年11月21日（土） 18：00～20：30（Zoom）

「社会に応答する演劇、演劇に応答する社会」

【講師】 ク・ジャヘ / 구자혜

【ゲスト】 安田菜津紀

【司会】 西尾佳織

【通訳】 韓国側 石川樹里 / 日本側 洪明花

【通訳補】 金世一

【会場】 大学路・アシテジ韓国センターオフィス / 下北沢・アレイホール

この回のセミナーでは、ク・ジャヘ氏がスケジュール的に30分ほど遅れる可能性があったため、石川樹里氏に最近10年の韓国演劇界の 이슈（問題）についてのレクチャーをお願いしました。ク・ジャヘ氏の作品や考え方を知る上で、前提的知識として重要と判断したからです。（実際には、ク・ジャヘ氏は予定時刻には到着されていません。）

■ 韓国演劇界の現在の 이슈（問題）について

図01

年表で見る最近の韓国演劇を知るためのキーワード

2008～2013年	李明博政権
2013年2月25日	パク・クネ大統領就任（父：朴正熙）
2013年9月	『蛙』（パク・クニョン演出）国立劇団で上演（개구리）
2014年4月16日	セウォル号沈没事件（세월호참사）
2015年4～6月	文芸委「創作産室」パク・クニョン演出に圧力
2015年10月	SPAF POP-UP THEATER『この子は』公演妨害

※漢字・カタカナ・ハングル表記は原文のまま



○石川 2013年まで政権を取っていた李明博（イ・ミョンバク）大統領は保守派の大統領でした。引き続き保守派の朴槿恵（パク・クネ）さんが2013年に大統領に就任しました。じつは李明博大統領の時代からすでに芸術界のブラックリストというものがあったらしいのですが、パク・クネの時代にこのブラックリストがさらに厳しくなりました。パク・クネが大統領に就任した2013年の9月に、日本でもよく知られているパク・クニョンさんの演出で、韓国国立劇団で『蛙』という作品が上演されました。これはアリストパネスのギリシャ喜劇を翻案したもので、パク・クネの父である朴正熙（パク・チョンヒ）大統領をパロディー化した作品でした。これによって朴根亨（パク・クニョン）さんは政府のブラックリストに加えられることになります。でもまだこの時点では、ブラックリストの存在は一般に知られていませんでした。

それから2014年4月16日にセウォル号沈没事件が起こります。チェジュ島に修学旅行に向かう高校生たちが団体で乗っていました。朝8時から9時くらいの間に沈没が始まり、ニュースで速報が入って国民の多くがその中継をずっと見ていました。そして一時は、乗客は全員救助されたというニュースが流れました。ところがそれは誤報で、午後になって300人以上がまだ救出されていないということがわかりました。この事件が韓国の国民の心を大きく動かしします。そのときパク・クネ大統領は大統領府にいながら、7時間も何も指示を出していなかったんです。それは空白の7時間と呼ばれています。そして7時間後に現れて最初に言ったのが「みんな救命胴衣を着ているのになぜ見つからないのですか？」という言葉でした。それが非常に国民の怒りを買いました。

その後、国民の中で真相究明を求める声が高まりデモなどが起きます。演劇人たちもかなりデモに参加して、反政府の動きが演劇界にも拡がりました。そして2014年12月に、ソウル演劇協会主催のソウル演劇祭……毎年5月に行われて35年ぐらい続いています……が、大学路にあるアルコ芸術劇場の貸館審査で落とされるという事態が起こります。それでみんな驚いて、演劇協会が公開討論会などを開いたのですが、なぜ急に審査を落とされたのかが謎でした。演劇界で抗議運動が起こりました。結局、ソウル演劇祭自体は別の会場を用意して開催されることになったのですが、それも前日になって、劇場施設に問題があって点検しなければならないなどと言われるなど公演を妨害されました。

2015年4月から6月にかけて。文化芸術委員会（韓国のアーツカウンシル）で「創作産室」という助成事業があります。これは毎年8作品ほどを選定して、インキュベーター・システムのように作品を開発するというプロジェクトです。助成額がかなり大きいので人気のある助成事業なのですが、この事業にパク・クニョンさんの『哀れ、兵士』という作品がすでに審査で選ばれていました。ところが文芸委の職員から劇団に連絡があり、「事業への参加を辞退してくれ。」と圧力がかかったのです。「選ばれた8作品のうち3作品に、これは上演しないでくれと上からクレームが来ている。だがパク・クニョンが『哀れ、兵士』を取り下げるなら、ほかの作品はやらせてあげよう。辞退しなければ、ほかの作品も上演できない。」それでパク・クニョンさんは考えた末に、創作産室への参加を辞退します。しばらくの間、このことは劇団内部でしか知られていなかったのですが、だんだん外に漏れていきます。『哀れ、兵士』は結局、ソウル市が運営する南山芸術センターの協力で2017年5月に初演され、フェスティバル・トーキョーでも上演されました。

それから2015年10月。SPAF（Seoul Performance Art Festival=ソウル国際公演芸術祭）で、若い演出家たちが劇場の中にあるシアターカフェで短い作品を上演するPOP-UP THEATERという企画がありました。この企画でキム・ジョンという演出家が『この子は』という作品を上演しようとしていました。今年、フェスティバル・トーキョーにオンライン参加もしていて、韓国内でも最近注目されている若手の演出家なのですが、このときはまだ新人でした。『この子は』という作品は、子供を亡くした母親の話です。翻訳劇をキム・ジョンさんが脚色して、亡くなった子が「ノース・フェイスのジャンパーを着ていた。」というセリフを入れました。ノース・フェイスというのはセウォル号に乗った高校生たちが着ていた若者に人気のブランドです。そのため、この公演はセウォル号事件のことを描こうとしているのではないかという理由で公演を妨害されたのです。最初からカフェで公演すると決まっていたのに、突然、責任者が現れて「こんなところで公演をしたらコーヒーを飲んでいる人たちの邪魔になるじゃないか。」とクレームをつけて、公演のために脇によけてあった椅子などを元に戻してしまったりして、非常に露骨な形で公演を妨害したそうです。

このPOP-UP THEATERでの公演妨害をきっかけに、大学路で演劇人たちの大きなデモが起こります。秋から冬にかけてのことでしたが、演劇人たちが毎日、大学路で「表現の自由を守れ」「検閲をやめろ」などと書かれたメッセージボードを持って立つスタンディング・デモでした。そこから若い人たちが検閲に対抗するネットワークを作っていきます。そして2016年の6月から10月までは「権利長戦・検閲却下」というフェスティバルが開かれました。大学路のはずれにある演友（ヨヌ）小劇場を5か月間借り切って、毎週ちがう団体が週替わりで公演していくのですが、すべて芸術に対する検閲をや

めろというメッセージを込めた作品を上演し、5か月間にわたって21の団体が参加しました。

セウォル号の真相究明を求める国民たちの動きと、芸術界のブラックリストに対する抗議などが次第に大きなうねりとなり、これが国民的な大きなデモにつながっていきます。

図02

2016年6月～10月	権利長戦 検閲却下フェスティバル 5か月間 21団体参加 (권리장전 검열각하)
2016年11月	大規模ロウソクデモ (촛불집회)
2017年1月10日～	広場劇場ブラックテント (광장극장블랙텐트)
2017年3月10日	パク・クネ大統領の弾劾訴追 (박근혜 탄핵)
2018年2月	演劇界の#MeToo
2019年7月24日	李潤澤 二審で実刑判決7年確定 (7년형확정)
2020年2月～現在	covid-19

そして2016年11月には大規模なロウソクデモが起こります。10万人、20万人という人が光化門の広場に集まってデモをしましたが、そのとき、芸術家たちも大きな役割を果たしました。詩人もいれば、美術をやっている人、踊りをやっている人、演劇をやっている人もいました。彼らは11月から翌年の2月頃まで光化門広場にテントを張って、厳寒の中、ずっと泊まり込みでデモに参加し、広場で歌を歌ったり、演劇をやったり、ダンスを踊ったり、大統領を批判するカリカチュアなどさまざまなアート作品を展示したりして政権を批判し、表現の自由を訴えました。そして2017年の1月からは、光化門前に大型のテントを建てて「広場劇場ブラックテント」と名付け、パク・クネ大統領の弾劾を要求する公演を日替わりや週替わりで上演したのです。

そして芸術界の抗議の高まりや国民のデモなどが大きな力となって、2017年3月にはパク・クネ大統領が弾劾訴追となり、ムン・ジェイン大統領が誕生しました。これで、これからは良い世の中がやってくる…みんなそう期待していました。ところが今度は2018年2月に演劇界で#MeTooが起こります。韓国では李潤澤（イ・ユンテク）という大物演出家……日本でもよく知られています……が逮捕されるという事態になりました。イ・ユンテク氏は二審で7年の実刑判決が確定しました。

今お話ししたように、セウォル号沈没事件、芸術界のブラックリスト、#MeToo、こういう流れがあって今に至っているわけですが、現在、韓国の演劇人が一番関心を持っている 이슈は「安全」だと言えます。つまり、いろいろな意味で一人一人の安全

をどうやって守っていくかということなのですが、そこに今年、コロナが降りかかってきたわけです。韓国の演劇界のコロナ対策はとても速かったと言われていますが、それは、セウォル号、ブラックリスト、#MeTooによって韓国の演劇人たちが安全に対して非常に敏感になっていたため、小劇場などでもいち早く消毒やマスク、検温などの対策を自主的に始めたという経緯があったと思います。

そして今年「演劇の年」に指定されています。演劇の年とは韓国政府が指定するもので、ある特定の分野、たとえば演劇であるとか映画であるとかに政府が支援をして活性化をはかるという制度です。ちなみに演劇の年は29年ぶりだそうです。どうして今年を演劇の年に指定したかという、ブラックリスト、#MeTooなどで非常に大きな打撃を受けた演劇界を、なんとか建て直そうという意味があったわけです。

「演劇の年」は通常、作品の上演を中心としたフェスティバルのような形で行われてきたのですが、今年はコロナという非常に特殊な状況があったので、ブラックリストや#MeTooなど、演劇界の環境を整備し、福祉の面を充実させていこうということで、ジェンダー教育、障害者の劇場からの避難をどうするか、権利の保障、劇団内部での権力を利用した暴力をなくす、などをテーマとした教育やワークショップが、ソウルだけでなく地方都市でも開催されています。

それから、#MeTooに関して言うと、韓国の演劇史を見直そうという動きにまでつながっています。それはなぜかという、これまでの演劇史が男性の目から見た演劇史だったのではないかという反省があるからです。日本も韓国も家父長制が非常に根深く残っている、そういう視点から見た演劇史が書物としても残されているわけです。だ



からフェミニズムの観点から演劇史を見直そうという動きが起こっているのが韓国演劇の現状です。

それから、ブラックリスト、#MeToo運動の教訓を生かして創作者の安全を守るために、法律を作って演劇界、芸術界の環境を整えようという動きがあります。現場のアーティストも加わって、芸術家の権利保障に関する法律を制定すべく働きかけています。今年、いちど国会での審議に落ちてしまったのですが、もう一度9月くらいに話し合いがあって、再度、法律制定に向けて動いています。

それからもうひとつの 이슈（問題）として、南山芸術センタードラマセンターの閉館があります。ここには親日という問題がありまして、たとえばパク・クネの父親のパク・チョンヒは親日の大統領でした。昔、日本の軍人だったのです。それが軍事クーデターで大統領になったわけです。

※韓国語における親日派（チニルパ）は、日本語の親日派＝日本に好意を持っている外国人という意味とは違い、日本の植民地政策に乗っかり、それに加担して利益を得ていた人々が1945年の解放後もその罪を清算することなく、依然として社会の中で優位な地位や利益を得ている、そうした人々のことを指す。

韓国では親日派が非常に嫌われていて、明日はそういうお話が出るのではないかと思います。親日派の演劇人（注：柳致眞ユ・チジン）が南山ドラマセンターを1960年代に建設しました。しかし当初はパブリックシアターとして設立したにもかかわらず、いつの間にかそれを個人の財産……、自分が運営する学校法人の財産にしてしまったのです。ここ10年くらいはソウル市が学校法人に毎年お金を払って劇場を借りた上でソウル文化財団がパブリックシアターとして使用してきたのですが、その契約更新がこれ以上できなくなるということで、12月に南山芸術センターが閉館することになりました。それが今、韓国の演劇界で話題になっている 이슈 です。

○川口 石川さん、どうもありがとうございます。私も、今年が韓国の「演劇の年」ということで、韓国では自分たちの演劇状況の改善に全体的なうねりとして活動しているということに驚きをもって受け止めました。労働環境というところにまで進んでいること。さらに、演劇史……家父長的な目線から書かれた演劇史の問い直しもしているというのは、日本の状況と比べるとたいへん驚くところがあるなと思います。日本にもいろいろなアクションはあるとはいうものの、それが全体としてのうねりにはなっていないと思います。もちろん他国と比べてどうのということではないとは思いますが。西尾さん、今のお話を聞いてどうですか？

○西尾 韓国に自分の作品を上演するために行ったこともあるのですが、そのときにソウルで活動している友人と話しても、問題を他人事ではなく自分の事としてとらえているのだなと思っていました。今日こうして時系列的にお話をうかがって、下地があつてのことだったのだなと思いました。安全をいかに守るかは、自分たちでやらなければダメなんだと思うに至つてのことだったのだなということが、あらためてわかりました。

○川口 安田さんはいかがでしょう？

○安田 たとえばセウォル号事件後のキャンドルデモは、私たちもニュースを通して見ていたのですが、そこに多くの文化人が参加していたというお話が今あったと思います。一方、日本の中で政治に関して声をあげたり、デモに参加しようという意志を表示したりすると、俳優やアーティストがなぜ政治に口を出すのかという……まだまだ日本の中でもタブー視する傾向が強いと思います。それを肌感覚でどうとらえているのかということをも伺っていただければいいのかなと思っています。

※司会者、西尾氏に交代。

○西尾 安田菜津紀さんをご紹介します。フォトジャーナリストである安田さんは、主なフィールドとして、カンボジアからスタートして、東南アジア、中東、アフリカまで広く活動されています。それらのフィールドで難民、貧困、災害などを取材されています。2011年の東日本大震災以降は、とくに東北地方にも足を運ばれ、陸前高田を中心に取材や人々をたずねる仕事をしていらっしゃいます。NPO法人Dialogue for People（ダイアログフォーピープル/D4P）の副代表もおつとめです。

本日は演劇とフォトジャーナリズムということで、虚構というよりは現実の事件や題材を使って作品を作っているク・ジャヘさんと、フォトジャーナリズムの力で遠いもの同士をつなぐということをやっている安田さんにお話をうかがいます。

ではク・ジャヘさんに作品をご紹介します前に、私から簡単にク・ジャヘさんをご紹介します。

ク・ジャヘさんは劇作家、演出家。2012年から「ここは当然、劇場」というご自身の団体を主宰していらっしゃいます。先ほど石川さんのお話にも出てきたセウォル号事件を扱った作品や韓国の#MeTooを扱った作品など、現実の事件、題材を扱った作品をたくさん作っていらっしゃいます。

現実の題材を使ってポストドラマ演劇の手法で創作をされているのですが、その題材のみが実際のもので作品自体はフィクションとして構成されているものと、インタビューなど実際に話された言葉をベースに作られている作品があるそうなので、その差異や創作背景についても本日もうかがいたいと思っています。

ではク・ジャヘさんご本人から作品の紹介をお願いいたします。

○ク・ジャヘ こんにちは。ク・ジャヘと申します。すごく緊張していますが、お招きいただきありがとうございます。

先ほど石川さんから韓国の社会的事件と演劇の関係についてご説明いただきましたが、とくにこれらの事件がどのように自分の作品に影響を与えたのかについて年譜を見ながらお話ししたいと思います。

私は2010年に劇作家としてデビューしました。

図03

2012

『ウェイティング・ルーム』ク・ジャヘ作・演出／project195演劇

『ここは当然、劇場』ク・ジャヘ作／恵化チェイルファスタジオ

2014

『砂の女』安倍公房原作、ク・ジャヘ脚色・演出

／ARKOが目目する若い芸術家シリーズ／大学路芸術劇場小劇場

『一回公演_ソンドル編』ク・ジャヘ構成、演出／化学作用／ソンドル劇場

『一回公演_大学路芸術劇場編』ク・ジャヘ構成・演出／AYAF Festival

／大学路芸術劇場

2012～2014年までに書いた作品と、2015年頃に書いた作品とではまったくカラーが違います。もともと自分が個人的にやりたかったのは古典などでしたが、2014年にセウォル号事件が起こり、そのあとにブラックリストや検閲の問題、パク・クネ大統領の弾劾などの大きな事件がどんどん起こって、まるで洪水に押し流されるように、自分が個人的にやりたいと思っていた創作はできなくなってきました。

2014年には安倍公房原作の『砂の女』を脚色して韓国で上演しました。このように良く書かれた、物語性のある作品を上演することに関心があったのです。

セウォル号の沈没事故は2014年の4月16日に起こりました。ところが私の作品が変わ

ったのは2015年からのことで、2014年には変化は見られませんでした。今回のセミナーで何を話すか考えていたときに、なぜ自分の作品は2014年には変わらなかったのかということを考えるきっかけとなりました。

セウォル号事件の前にも……、日本で『はちどり』という映画をご覧になった方はわかると思いますが……、昔、漢江（ハンガン）という川にかかった橋（聖水大橋）が落ちたり（1994年）、三豊百貨店（サンブンデパート）が崩壊したり（1995年）という事件が起こったこともあります。私は子どもの頃にそういう事件を体験し、もちろんたくさんの方が亡くなって、惨事は惨事だけれど、それを社会的な惨事（※たんなる偶発の事故ではなく、社会的な構造の中で起きた事故。一種の人災とも言えるだろう）として認識することはできていませんでした。でもセウォル号が沈没した時は、ああ、これこそが社会的惨事なんだと認識しました。でも、2014年に事故が起こった直後は、自分が一人の市民として動揺し、そのことをすぐには受け入れることができなかつたのだと思います。アーティストが一つの社会的惨事を消化するための時間、距離感、客観性といったものを培う時間が必要だと思います。しかし私たちにとってセウォル号事件は現在進行形の事件で、ある程度客観的な距離を置いて作品として創作するという時間的な余裕もなく、事件後、毎年セウォル号に関する新作を作って上演しました。

ですから、昔は1本の作品を6か月かけて書いたりしましたが、今は社会の移り変わるスピードに合わせて社会とともに呼吸しながら書いていくという感じに変わっているの

図04

2015

『ディス・ディストピア』ク・ジャヘ作・演出

／ソウル演劇センターNewstage／大学路芸術劇場小劇場

『哭婢』ク・ジャヘ作・演出

／演劇実験室・恵化洞1番地 6期同人春フェスティバル「総体的乱劇」

／演劇実験室・恵化洞1番地

『貧しい者たちについて』チェ・ソヘ作、ク・ジャヘ脚色・演出

／韓国近代文学劇場／演劇実験室・恵化洞1番地／仁川アートプラットフォーム

『今日の4月16日、2015年8月』ク・ジャヘ構成・演出

／演劇実験室・恵化洞1番地 企画招待公演「セウォル号」

／演劇実験室・恵化洞1番地

『commercial, definitely_マカダミア、盗作、MERS、そして Mansplain』ク・ジャヘ作・演出

／演劇実験室恵化洞1番地 6期同人秋フェスティバル「商業劇」

／演劇実験室・恵化洞1番地

『一回公演_アーカイブ編』ク・ジャヘ構成・演出／アーカイブ編

で、2か月くらいの短い期間に集中して劇団メンバーと意見を交換しながら書くようになっていきます。

2015年には、『commercial, definitely_マカダミア、盗作、MERS、そしてMansplain』という作品と『哭婢』という作品を作りました。

※MERSは数年前流行した中東呼吸器症候群のこと。韓国では2015年に感染が広がった。

※哭婢（ゴクビ）とは、葬儀の際、悲しみや涙をとぎらせないように泣き続ける職業の女性。

『commercial, definitely_マカダミア、盗作、MERS、そして Mansplain 』

特に私はフェミニストですから、男性のマンズプレインはほんとうに腹立たしく思っています。それを批判する作品です。

※マンズプレイン（mansplain）は男（man）+説明（explain）からできた造語。女性は男性より物を知らないという偏見を前提に、男性が女性にえらそうに説明（説教）すること。その名詞形がマンズプレインング（mansplaining）

■『哭婢（ゴクビ）』

演劇界は昔から徒弟制度のようなものがあり、そのために権力型の暴力が発生しやすい環境です。その徒弟制度を告発する内容の作品です。

そして2015年にはじめてセウォル号を題材にした作品を作ります。『今日の4月16日、2015年8月』

2016年には、『キリングタイム』という作品を上演しました。これもセウォル号に関する作品です。

■『キリングタイム』

2015年にはじめて演劇を通じてセウォル号の話をしようとしたとき、私にも劇団員たちにも非常に躊躇がありました。この大きな事件に対して私たちに何かを言ったりやったりする資格があるのか？ そうした自信のなさ、とまどいがありました。それで私たちは最初の作品を創作するにあたって「言葉にはできない、ためらいがちな言葉」というものを劇言語として選びました。